

# 第7回 梨大胚培養士アカデミーセミナー 開催のご案内

日時:2022年10月12日(水) 16:30~18:00

Zoom (以下のサイトをクリックして登録ください。)

<https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZwrce2vpjMjEtMNP7YDLxRPnKZtAxowJq2>

## 「細胞遺伝学の出会いと今の仕事」

笠島道子 博士

京野アートクリニック仙台・高輪、永井マザーズホスピタル 他  
認定遺伝カウンセラー®

山梨大学の高度生殖補助技術センターの設立に当たり、今後胚培養士育成に少し関わらせて頂くことになりました。本講演では、自己紹介としてこれまでの経緯を紹介しながら、細胞遺伝学と生殖医療の関りや、認定遺伝カウンセラーの仕事についてお話ししたいと思います。

細胞遺伝学との出会いは北里大学病院に臨床検査技師として就職し、初めて染色体検査という言葉を知りました。配属1名に対し2人が希望する中で、くじを引き当てたことに始まります。1970年代の染色体検査は新しい染色法の開発競争と、いかに綺麗な標本作製するかという職人技磨きのような時代でした。今日ではあまり利用されない染色方法などにも触れてみたいと思います。1980年代に入り大学病院の染色体検査は、出生前診断としての羊水検査が大部分を占めるようになりました。特に高年齢妊娠を主訴とする希望者が年々増加し、進行する妊娠週数を追いかけるように検査結果を作成するという多忙な毎日でした。その頃、北アフリカの地中海に面したアルジェリアに北里大学が医療協力する話が舞い込み、1年間赴任しました。この異文化の中で生活した貴重な体験は、その後の人生の大きなターニングポイントにもなっています。1990年代になると体外受精の話題を見聞きするようになり、東北地方で開催されたセミナーに参加する機会がありました。興味深い内容と同時に、将来の身の振り方を考えていた時期とも重なり、生殖医療領域への方向転換も考えるようになりました。その頃、ある雑誌でポスドク募集の記事を見たことがきっかけとなり、メルボルン大学産婦人科のRBU(Reproductive Biology Unit)で研修できる機会を得ました。RBUでは胚盤胞培養の手伝いと、マウスの胚盤胞を利用した胚生検や生検細胞の染色体解析を試みていました。この頃、FISH法が導入されましたが当時はとても高価で使えませんでした。2000年代には栃木県の中央クリニックに併設されていた高度生殖医療技術研究所で臨床の染色体検査と、不良胚や余剰胚を利用した細胞遺伝学的解析などを試みていました。この頃、人類遺伝学会は遺伝医療を担う臨床遺伝専門医制度を施行し、コメディカル遺伝カウンセラー養成の専門課程が開設され2年後に認定遺伝カウンセラー制度が発足しました。生殖医療のクリニックにおいても遺伝カウンセリングの必要性を感じていたことから、認定遺伝カウンセラーの資格を取得しました。最近では認定遺伝カウンセラーの仕事も徐々に周知されるようになってきましたが、日本の現状について触れてみたいと思います。

現在、PGT-A(着床前胚染色体異数性検査)やPGT-SR(着床前胚染色体構造異常検査)に関わる仕事が続いていますが、細胞遺伝学の知識や認定遺伝カウンセラーの資格は必要不可欠であり、半世紀も前に得た知識は未だ色褪せず、とても役に立っていると感じています。

以上、個人的な経験を基にしたお話をいたしますが、皆様が将来に向けて考える時、少しでも参考になることがあれば幸いです。

問い合わせ : 高度生殖補助技術センター 岸上哲士(8705)